



雲の宴 [上]

辻 邦生



雲の宴 [上]

辻 邦生

雲の宴^{うみ}(上)

一九八七年三月二十日 第一刷発行

著者 辻 邦生

発行者 八尋舜右

印刷所 共同印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五ノ三ノ二
電話 ○三―五四五―〇一三二(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇一―七三〇

定価 一三〇〇円

箏よ琴よ覚むべし、
われ黎明しやうめいをよびまさん。

——詩篇——

雲の宴 (上) 目次

第一章	五月	7
第二章	二人	49
第三章	迷路	91
第四章	遍歴	131

第五章
密使

171

第六章
海図

207

第七章
白楊

247

第八章
漂流

287

第九章
黒海

329

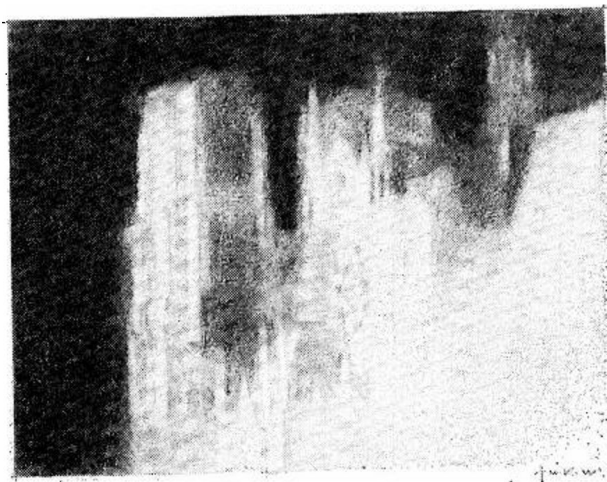
第十章
沈鐘

367

装画 福本章
装釘 中島かほる

雲
の
宴^{うたげ}
(上)

第一章 五月



さつきまで夕焼けの拡がっていたリュクサンブール公園の上の空から、赤い輝きが失われ、横に縞になった雲のへりに、わずかに樺色かばいろがにじんでいた。

窓を背に坐っていた銀髪の日焼けした六十恰好の男は、背中をこごめ、食卓の上の書類を揃えた。それから葡萄酒を一口飲み、「アフリカのこと、ぼくから申しあげられるのはこの位ですね」と低い声で言った。

若い女は、その時、夕焼け空から、窓ガラスにへばりつくようにして飛んでいる蠅のほうに眼を移した。何から何まで清潔なレストランの隅で、蠅が喘あえぎながら飛んでいるのがひどく息苦しく、ちぐはぐな感じに見えた。

「重いですね」

若い女のそばに坐っていた大柄な青年がつぶやくように言った。

「そうですね」銀髪の男は眼を伏せ、食卓のうえの物を捜すような表情で言った。「おっしゃるとおりかもしれません」

「それが分っただけでも有難いと思います」

「ぼくだって分っているようで何も分っていないのと同じです。だからむこうに住みついているようなものですから」

銀髪の日焼けした男はナブキンで口を拭いた。

「重いですね、アフリカって重いですよ」

大柄な青年はもう一度そう言うと言と身体を揺すった。

「フランスだって重いですよ。どうしてどうして決して身軽に立ちまわっているわけじゃありません。もうそろそろ結果が出るはずですよ。今ごろみんなテレビの前に釘づけでしょう」

銀髪の男は腕時計をのぞきこんだ。そういえばレストランの中は、三人の日本人のほか人影は見当らなかった。

「保守のほうに優勢と聞きましたが」青年が言った。

「予想ではそうでしたが、こんどはちよっと分りません」

「もし逆転劇が見られるようだったら、ぼくらは運がいいわけですね」

ちょうど午後八時をすこし廻った時刻で、フランスの大統領選挙の開票結果が刻々に明らかになっているところだった。

五月のながい夕暮が、白い蠟でできたような花を枝いっぱいにつけた並木の上に、淡い紫を含んだ色合いで漂っていた。若い女は選挙のゆくえを話し合う二人の声に耳を傾けていたものの、自分の気持が、選挙などより、静かに暮れてゆくこの端正な都会に惹かれているのを感じた。

こうした美しいものの前では政治など無意味なのではないだろうか——若い女は自分がジャーナリストであることを忘れて、しばらく窓の向うの、水のように透明に澄んだ夕空に眼を向けていた。

三人がコーヒーを飲んでいると、広間の隅に控えていた白い制服のギャルソンが「本当か、まさか、本当か」と声高に叫んで奥へ走りこんでいった。

「どうやら本当に逆転劇が起ったみたいですね」

銀髪をした志摩修治がギャルソンを見て言った。間もなくレストランの前を、鋭くクラクシヨ

ンを断続的に鳴らしながら、自動車がもの凄いい勢いで走りぬけてゆく音が聞えた。身体の大きな水無瀬大吉が窓から覗くと、幌型のシトロエンの覆いを取った車体から、数人の若者が身体を乗りだし、何か叫びながら、Vの字に開いた指を振りまわして走ってゆくところだった。大吉は反射的にカメラを握んだ。

「ここはぼくがすませておきますから、早くバスチーユ広場にいらっしゃい。やはりミッテランが勝ったそうです」

奥の調理場にいつてニュースをたしかめてきた志摩修治が言った。

「やはりそうなんですか」

大吉はすでに帽子をかぶり黒いシオルダー・バッグを肩に掛けていた。クラクションを鳴らしながら、気の違ったように走る車が、二台、三台とその数を増していた。

「タクシーはつかまらんでしょう。オデオンまでいつて地下鉄でいらっしゃい。オーステルリッツ駅が終点ですから、そこから歩いてバスチーユまですぐです。革新派の拠点はいつもバスチーユですから、その途中でも取材できると思います」

「先生はどうなさいますの？」

若い三上敦子が言った。

「ぼくはカルティエ・ラタンをぶらぶらして、疲れたらホテルに帰っています。用があつたらホテルに連絡して下さい。あなた方は今夜は夜あかしになりますよ。何しろ人民戦線以来の歴史的瞬間なんですから」

二人は志摩修治と別れると、オデオン座の前の通りを地下鉄のほうへ急いだ。夕空はすでに赤みを失って、水のように蒼く澄み、灰色のマンサード屋根の上に星が銀色に一つ二つ光りはじめ

ていた。

端正に彫り込んだように並ぶ建物の窓という窓から、人々が顔を出し、クラクションを鳴らして次々と走りぬげる車を眺めていた。身体の高い水無瀬大吉は望遠レンズを使って、窓から身乗り出してゐる人々の表情を撮影した。どこからともなく一人二人と興奮した表情の人たちが街角に現われ、サン・ミッシェル大通りのほうへ向つていた。

地下鉄の駅はラッシュ時のような混み方だった。大吉はオレンジ色のプラスチック製の椅子の上のつて、興奮し、肩を組んで叫んでいる若いグループのほうへカメラを向けた。大吉のカメラのフラッシュが光ると、若者たちはいっせいに大吉のほうへVサインを送り、「ミ・テ・ラン、ミ・テ・ラン」と三拍子で叫びはじめた。オーステルリッツゆきのメトロも満員だった。しかし大吉と三上敦子は陽気な若者たちのグループに取りまかれた形で、車輻に押し込まれた。

バスチーユ広場にはまだ青白く宵明りが残り、照明された広場中央の青銅の記念柱が、縞模様

に光の残る西空を背景に、くつきり浮び上つて見えた。

広場に入ってくる五本の大通りから、クラクションを断続的に鳴らす車の列が、ヘッドライトを光らせ、まるで黒い牡牛の群のように、並んで走り込み、記念柱のまわりをぐるぐると廻つていた。水無瀬大吉は地下鉄の昇降口の外に出ると、この光景に息を呑まれたように、その場に立ちつくした。

「敦子さん、これは足場を見つけないと駄目ですね。どこか広場を見渡す場所がないと……」

「あの辺の窓からはどう？」

敦子は広場を見下すように建つてゐる建物の高い窓を指さした。

「あそこなら願つたり叶つたりだけど」

「それじゃ行きましょう、頼めば、きっと窓から撮^うらせて貰えるわ」

二人は広場に沿って走り、目ざす建物の玄関に飛び込んだ。管理人室には誰も見当らなかつた。

「エレベーターはどこだろう」

「エレベーターなんてないのよ」

「じゃ八階まで階段で登るわけ？」

「大吉さんらしくないわね。志摩先生の言葉じゃないけれど、今はまさしく歴史的瞬間よ。とりにがす手はないわ」

二人は廻り階段を駆けのぼった。屋根裏部屋のドアの前で、息を切らせながら敦子はベルを鳴らした。顔を出した赤毛の女が、怪訝^{けげん}そうな表情で二人を見つめた。

「私たち、日本のジャーナリストなんです。広場の光景を窓から撮^とらせて欲しいんです」

敦子は肩で息をつきながら、フランス語でそう言った。赤毛の女はスペイン人らしく訛^{なま}りの強いフランス語で答えた。

「部屋の中はちらかってるよ。よかったらはいんな」

狭い部屋には、女の母親らしい老婆と子供二人が低いソファに坐って、テレビの白黒の画面を見ていた。その画面には、ミッテランの顔が大うつしになっていた。

水無瀬大吉は窓を開けると、望遠レンズをのぞいた。上から見ると、広場に集ってくる車は、眼を光らせた黒い昆虫の群のように見えた。一方の赤信号が青になると、どっと車の群が流れ込む。すでに前の一団が渋滞しているので、みるみる広場全体が車で埋まってゆく。その車と車のあいだに刻々に群衆が溢れてきた。広場は車のクラクションと海鳴りのような喚声でどよめいていた。大吉は望遠レンズを広角に換え、また望遠を取り出すというふうで、絶え間なく広場にふ

くれ上ってくる群衆の姿を撮りつづけた。遠く屋根の連なりの向うに横縞になって白く水のように澄んだ空が見えるだけで、ようやく夜が騒然としたパリを包みはじめた。

二人が建物を駆けおりてふたたび広場に飛び出したとき、すでに広場は沸きたつ群衆で埋まっていた。交通は完全に麻痺していて、車の列のなかに群衆が入りこんだというより、ふくれ上る群衆のなかに車が埋没した感じであった。赤旗を持った一群の若者が、にっちもさっちもゆかなくなつた車の上によじ登り、「ミ・テ・ラン」の三拍子の喚声をあげていた。

大吉は赤旗を振る青年をいろいろの角度から撮影した。若い娘が青年に抱きつき、Vサインを出しながら、接吻した。どつとまわりから喚声があがり、拍手がそれにまじつた。やがてそのばらばらの拍手が、三拍子の拍手に変わってゆき、「ミ・テ・ラン」の大合唱がそれと一つになった。大吉は三上敦子に「これが人民の顔ですね。これこそが民主主義の顔なんです」と怒鳴るように言ったが、敦子にはその声がほとんど聞えなかつた。彼女はカメラを撮りまくっている大吉と離れないように、群衆を押し分けながら、広場をあちこち動いた。

広場の中央に照明を浴びて鮮かに浮び上る青銅の記念柱の向う側で、潮騒のように、「インターナショナル」が湧き起り、それはまたたく間に、広場を埋めつくす群衆の大合唱となつていった。

水無瀬大吉は記念柱の台座を占領し赤旗を振って音頭をとっている一群の若者たちに近づき、フラッシュを光らせた。歌声は感動の大きなうねりとなつて盛り上り、旋回し、沈静し、ふたたび激しく高まつていった。

大吉は三上敦子のほうを振りかえつた。敦子は、肩を組もうとして近寄ってきた背の高い青年のほうへ、笑って頭を左右に振り、大吉に向つて右手をあげた。